

(報告タイトル) 塩がつなぐフィリピンと日本の農村—地域経済と結婚移住女性の移民ネットワーク—
(英語) Trans-local Networks between the Philippines and Japan – The Roles of Marriage Migrant Women and Salt Business –

(発表者) 大野恵理 (フェリス女学院大学人文科学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC2)

(英) Eri Ono Graduate School of Humanities, Ferris University, JSPS Research Fellow (DC2)

(キーワード) 国際結婚、結婚移住女性、移民ネットワーク、フィリピン、トランスローカルビジネス

はじめに

本研究では、1990年代前後に「行政主導による国際結婚」で来日した、フィリピン出身結婚移住女性の移動に着目し、親族を中心とした移民ネットワークの形成と拡大を明らかにする。いわゆる「農村花嫁」に関する既存の研究では、農村社会学(仲野、1998、松本・秋武、1994)、家族社会学(右谷、1998、賽漢卓那、2011)等の観点から研究が行われてきたが、彼女らをグローバルな経済システムやジェンダー構造の中の「犠牲者」とみなし、結婚により自ら道を切り開こうとする主体性に注目する視点はやや不足(李、2012)していた。また彼女らの出身国ではなく、日本側の地域社会や家族の意識により重点が置かれてきた(賽漢卓那、2011、p34)。近年、結婚移住女性の移動そのものや来日後の定住過程における主体性を論じる研究(Faier、2009、武田、2011)が行われてはいるものの、依然として彼女らを主体的行為者として取り上げる視点は希薄(賽漢卓那前掲)である。さらに、フィリピンの出身地や送り出し家族との関係性や親族ネットワークを追究する視点は、極めて限定的(西口、2006)である。以上のことから、本稿では結婚移住女性を移動する主体としてとらえ、移民ネットワークをどのように形成し展開してきたかを論じる。

研究方法

研究対象は、新潟県上越市中山間地域在住のフィリピン出身結婚移住女性2名、フィリピン在住の家族や親族及び上越市の地域住民である。彼女たちは20代で来日し、30年以上同地域に居住している。2名は塩の名産地として知られるルソン島中部の沿岸地域出身であり、もともと親族関係にあたる。「行政主導の国際結婚」により同時に来日した。半構造化インタビュー及び上越市とフィリピンにおけるフィールドワークを行い、データ分析をすすめた。分析枠組みは、出身国と移住先社会をつなぐものとしての社会的紐帯(家族や世帯の強い紐帯、移住者と斡旋者による関係)に注目する分析視角としての移民ネットワーク論(Faist、2000)を用いる。

事例及び考察

(1) フィリピン出身結婚移住女性と親族ネットワーク：多くの国際結婚研究においても指摘されているように、日本人男性に紹介し呼び寄せる「連鎖移民」の形式によって、親族ネットワークが水平的及び垂直的に拡大していった。対象者はいずれも親族女性を呼び寄せ、日本人男性との結婚を仲介していた。彼女らが先駆者として「水路付け channeling」したことにより、日比をまたがる親族ネットワークが拡大した。また移住女性1名の姪が日本人男性と結婚し、東京に住むことになった際、彼女の母親(移住女性の妹)は実姉が日本にいたことが安心材料となったといい、間接的に社会的紐帯が移住を促したといえる。この結婚によって、親族ネットワークが地理的にも拡大をみせていった。

また彼女らは、家業である農業の人手として、近年定期的に親族を呼び寄せていた。夫の家族は兼業農家であり、米や野菜等を栽培していた。結婚以来、彼女たちも農作業を行ってきたが、送出家族への

支援や生活水準の向上に貢献しようという意思を持ち、その一つの形として、親族を呼び寄せていた。やがてきょうだいの子どもが成長し家庭を持つようになると、彼らもともに呼び寄せるように変化し、次世代にもつながるネットワークが形成されつつある。

(2) 移民ネットワークとトランスローカルビジネスの進展：結婚移住女性からの働きかけにより、上越市の実業家男性と、フィリピンで塩を生産している実弟（生産者兼卸売商）との塩のトランスローカルビジネスが開始された。10年以上継続的に取引が行われ、上越地域の特産品としても売り出されている。その他にも、農産物の栽培にも塩のミネラル成分が活用され、通常価格よりも高値で取引される農産物を生み出している。一方移住女性の実弟は、この取引により確かな経済的基盤を得て、子どもを大学に進学させ、社会的上昇を果たすことができた。実業家の男性は、さらに移住女性の甥（妹の子ども）を日本に呼び寄せ、働いてもらうことを画策している。しかし移住女性は、メディア等での広報活動や実業家男性のフィリピンでの滞在先の工面等に協力はするものの、日本における販売活動には積極的に関わろうとしていない。これには、親族移民ネットワークにおけるトランスローカルビジネスの位置づけ、また出身地とは異なる日本の農村女性の社会規範（山下・工藤・土井・安倍、2006）やジェンダー規範の影響があることがうかがえた。このように結婚移住女性を起点とする日本とフィリピンの親族移民ネットワークは、地域住民や地域の経済活動と結びついたことにより、次世代にもつながっていくことが明らかになった。また、地域社会の経済活動にも十分貢献しうるトランスローカルビジネスを生み出したともいえる。結婚移住女性は、その始まりは「農村花嫁」として非常にローカルな文脈に位置付けられた存在であったが、親族移民ネットワークの起点として、トランスナショナルな移動を生きる主体であることも、同時に提起したい。

参考文献

- Faier Lieba, 2009, *Intimate Encounters: Filipina Women and The Remaking of Rural Japan*, University of California Press.
- Faist Thomas, 2000, *The Volume and Dynamics of International Migration and Transnational Social Spaces*, Oxford University Press
- 李善姫（2012）「グローバル化時代の仲介型結婚移民—東北農村の結婚移民におけるトランスナショナル・アイデンティティ」大西仁・吉原直樹監修『移動の時代を生きる—人・権力・コミュニティ』東信堂、pp3-41
- 松本邦彦・秋武邦佳（1994）「国際結婚と地域社会—山形県での住民意識調査から（その1）」『法政論叢』創刊号、pp260-127（原文は縦書き）
- 松本邦彦・秋武邦佳（1995）「国際結婚と地域社会—山形県での住民意識調査から（その2）」『法政論叢』4号、pp206-178（原文は縦書き）
- 右谷理佐（1998）「国際結婚からみる今日の日本農村社会と『家』の変化」『史苑』59号1巻、pp72-93
- 仲野誠（1998）「『外国人妻』と地域社会—山形県における『ムラの国際結婚』を事例として—」『移民研究年報』4号、pp92-109
- 西口里沙（2006）「移民システムに関する一試論—フィリピンから日本への人の移動を考えるために」『社会学研究科年報』13号、pp93-102
- 賽漢卓那（2011）『国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房
- 武田里子（2011）『ムラの国際結婚再考—結婚移住女性と農村の社会変容—』めこん
- 山下仁・工藤清光・土居洋平・安倍澄子（2006）「農村女性の社会活動を阻む社会規範と気兼ね意識」『農村生活研究』131号、pp18-27